恩師 James Lindsay White 先生を偲んで

末 次 義 幸*

昨年 11 月 28 日、アクロン大学 Cakmak 先生からのメールで White 先生の悲報に接しました。同月 26 日フランクフルトにご家族を訪ねられていたときの出来事とのことでした。ご勇退の噂も耳にしており、次に日本に來られたときにはまた関係者と門下生で集まりたいと考えていた矢先のことでしたし、あまりに早いご逝去で悲しく残念な気持ちでいっぱいです。

White 教授の業績については鞠谷氏が詳述されているので、ここでは先生と日本の大学や企業人との深いかかわり、学生としての思い出について書かせていただくことにします。

日本の大学や企業人との深いかかわり

筆者は 1979 年から 1986 年の間、学生としてまたリサーチフェローとしてテネシー大学とアクロン大学で White 先生に師事する幸運を得ました。先生は、ユニロイヤルでゴムの混練の研究をされた後、1967 年にテネシー大学の Department of Chemical Engineering, Metallurgical and Polymer Engineering に招かれました。当時、「繊維のプロセッシングを研究の軸に考えていたけど、繊維工業が思ったほど発展せず見誤ったと思ったよ」とおっしゃって

ました。先生はレオロジーと繊維のプロセッシングだけでなく、いち早く射出成形やフィルム成形、ブロー成形、混練など精力的に研究分野を広めていかれましたが、分野を拡大された要因の一つには上記があるかと思われます。

私がテネシー大学の White 研究室に留学した 1979 年当時、既に日本の大学や企業からの多くの方々が所属しておりましたが、最初の日本人研究者は 1969 年 6 月から 1 年間、客員教授として招かれた故山本三三三氏（当時東京都立大学）と思います。氏は White 先生、故 Bogue 先生と高分子レオロジーの研究を進められましたが、当時を思い返しながら「Professor Yamamoto は、はじめは寡黙だったけど慣れてくると“それは違うよ！”とはっきり意見を言っていた。日本の研究者のレベルはすばらしいね」とおっしゃっていたことを思い出します。その後、京都大学（小高忠男氏、松本孝弘氏、小野木禎彦氏、島村薫氏）、工学院大学（大柳康氏、久保田和久氏）、京都工芸繊維大学（松本喜代一氏、北尾敏男氏）、山形大学（小山清人氏、須藤新一氏、岩倉賢次氏）、東京工業大学（鞠谷雄士氏）など多くの日本の大学との関係を深められ精力的に広範な研究を進められました（所属は当時のもの）。

日本の学生や企業人の受け入れにも積極的で、72 年頃から多くの日本人がお世話になっています。70 年代前半では常時 2~3 名、70 年代後半から 80 年代前半にかけて常時 5~6 名、最も多い 80 年代後半は約 10 名の日本人が在籍していました。把握している限りでは合計で日本の大学から 20 名以上、企業人・学生として 40 名を越す人数がお世話になったことと思います。

写真 1 Tennessee 大学着任してまもなくの White 先生（後列右から 3 人目）

* Suetsugu, Yoshiyuki
出光興産(株) 先進技術研究所
袖ヶ浦市上泉 1280 (〒229-0293)
2010.1.22 受理

写真 2 Tennessee 大学高分子工学科の建物前で（1980 年頃）

日本だけでなく韓国、中国、インド、メキシコ、ナイジェリア、トルコ、スウェーデン等の国々から学生や教職員を大勢受け入れられており、アメリカの大学でありながらアメリカ人がマイノリティという状態でした。White 先生はなかなか学位をくれないという評判がありアメリカ人学生が敬遠しがちだったことがあります。先生も“一般論として”「アメリカ人よりも留学生の方が勤勉」と考えておられたことも研究室の特殊な構成の理由だったように思います。

1983年に部門長としてアクロン大学に移れましたが、テネシー大学から私を含め7名のスタッフと学生が先生とともに移動しました。建物は古い倉庫を改装中で、初めは壁のペンキ塗りや机、機材を組立てる日々が続いたことを懐かしく思い出します。このころから教授陣も国際色が豊かになりました。

最近では日本の大学でも一般的になりましたが、研究ファンドはNSF (National Science Foundation) だけでなく、広く企業から集められており、賛助企業にコンソシアム形式で成果を発表、還元されていました。

学生としての思い出

先生ご本人からの話だったかどうか思い出せませんが、先生は若い頃に人種差別に反対する学生運動で刑務所に入れられた事がある、とうかがった記憶があります。多くの留学生を受け入れ公平、平等に接されたことや日本人の奥様と結婚されていたことなど納得したものでした。

先生の毎日の生活は、ご自宅での夕食後にすぐに仮眠を取り、その後明け方まで文献を読んだり執筆をして朝2～3時間の睡眠を取って、大学での講義や指導、出張先の講演や打合せに出かける、という生活の繰返しでした。一度ご自宅の仕事部屋を拝見したことがあります。広い床中に文献や本、書きかけの原稿が散乱しており、あの真ん中に座って仕事をしているんだよ、とおっしゃっていました。多くの文献の筆名、掲載ジャーナル、巻、ページまで記憶されているのに驚かされましたが、このような厳しい生活があったわけです。1981年にBingham Medalを受賞されたときには門下生一同、大いに喜びました。また、超がつくほど博識で有名な歴史知識についてはもっぱら移動中の飛行機の中で研究されていたようです。

想像を絶するようなご多忙な生活でしたが、疲れたご様子もなくいつもお元気でよく昼食や夕食に誘っていただき、夏はバーベキューパーティー、冬はクリスマスパーティーでご家庭にも何度もお招きいただきました。パーティーは学生だけでなく職員や家族、秘書も参加するのでたいへんな人数でした。アルコールが入ると歴史の話がしたい先生の気持ちとは関係なく、ダンスパーティーになったり、地下のプレイルームで卓球やダーツに興じて大いに楽しませていただいたものです。

ご家庭のことは奥様（洋子さん、故人）にまかせっきりで、「大好きな日本のインスタントラーメンも自分では作れない」と笑っておられました。洋子さんがお亡くなりになった後のご不便を想像すると胸が痛みます。お亡くなり

になった後、奥様の小物や化粧品を捨てるのが辛くてね、と嘆いておられました。愛妻家でもあられました。

ご恩返しができていないことを恥じつつ、深い惜別の悲しみをもって先生をお送りしなければなりません。先生の研究と教育に対する大きな業績と熱意は、ご友人とともに研究された多くの方々、ご指導いただいた者たちの胸に生きつづけていくことと思います。安らかに永久の眠りについてください。

写真3 Bingham Medal の受賞（1981年）
写真上；後列右から7人目が White 先生、6人目が奥様の洋子さん（故人）、右端が筆者
写真下；White 先生（右）と奥様

写真4 先生宅でのクリスマスパーティー（1985年頃）地下のプレイルームで門下生や関係教職員とともに